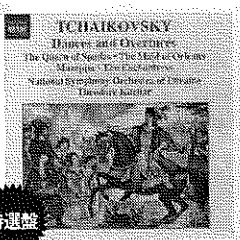
新譜月評 管弦楽曲

藤田由之　金子建志

新譜月評 The Record Geijutsu 管弦楽曲 CD 32

■チャイコフスキー／舞曲と序曲集



特選盤

〔《スペードの女王》序曲／幻想曲《運命》／《ヴォイエヴォーダ》序曲／《オルレアンの少女》より／《チェレヴィチキ》より／他〕
（詳細は巻末新譜一覧表参照）
テオドレ・クチャル指揮ウクライナ国立交響楽団
［ナクソス⑮8.554845］
オープン価格

藤田由之●*Yoshiyuki Fujita*

推薦　テオドレ・クチャル指揮のウクライナ国立交響楽団が、『チャイコフスキー／舞曲と序曲集』と題したアルバムをレコーディングしたが、これはまさにナクソス・レーベルならではの選曲ともいえ、その点で、まずライブラリー的にも見のがせないものがあるといえるし、演奏家たちもまた、そうした目的を果たすということ以上のコンスタントな力を備えているといってよいであろう。

その曲目というのは、序曲としては1890年の《スペードの女王》と68年の《ヴォイエヴォーダ》、それに81年初演の《オルレアンの少女》の第2幕への前奏曲と87年の《チャロデイカ（魔女）》冒頭の序奏などが収められており、舞曲としては、《オルレアンの少女》第2幕の〈ハンブシーの踊り〉と《道化役者と大道芸人の踊り》、73年の《鍛冶屋のヴァクラ》を85年に改作した《チェレヴィチキ》第3幕の〈ロシアの踊り〉と〈コサックの踊り〉、83年の《マゼッパ》第1幕の〈コバーク〉、72年の《オプリーチニク（親衛兵）》第4幕の〈踊り〉、それに《チャロデイカ》第1幕からの〈大道芸人の踊り〉も加えられているが、もともとチャイコフスキーのオペラそのものが、《エフゲニー・オネーギン》などを別として、わが国ではあまり広く知られているわけではないだけに、ここに連ねられているオペラからの音楽については想像もできないという人もあるにちがいない。しかし、聴いてみればそれなりに楽しめるというのがチャイコフスキーということなのでもあろう。

なお、ここには、1868年末に書かれ、翌年2月に初演されたが、その後まもなく破棄され、没後にオーケストラ・パート譜から再構成され、作品77として出版された幻想曲《運命》も収められているが、この作品には、すでにドラティやスヴェトラーノフによる録音もあったはずだ。

演奏しているウクライナ国立交響楽団は、1937年に創設されたこの国を代表するオーケストラであり、クチャルは1992年から2000年までその芸術監督兼首席指揮者をつとめ、2000年からは終身桂冠指揮者の地位にある。かなり安定した演奏力を備えたアンサンブルといってもよさそうで、こうしたロシア音楽での音色、リズム、語法などに、いわば練られた適応性も見ることができよう。

金子建志●*Kenji Kaneko*

推薦　筆者が関わっているアマチュア・オーケストラのひとつにショスタコーヴィチの作品を専門に演奏する「ダズビダーニャ」がある。そこで《ハムレット》（映画音楽ではなく、劇音楽のほう）の練習をつけたのだが、これがチャイコフスキーそっくりなのだ。ショスタコーヴィチには意図的にチャイコフスキーを真似たのではないか、と思える作品がけっこうある。そうした曲に接すると、ロシアのロマン派における大樹としてのチャイコフスキーの作風が、明らかに存在していることを実感させられることになる。

ここで演奏されている12曲の中のいくつかでも、そうした個性が刻印されている。例えばオペラ本体から切り離した形で演奏されることは皆無に近い《オルレアンの少女》の第2幕への場面転換の音楽や、《スペードの女王》の序曲で、曲想が叙情的に急転する1分54秒からは《くるみ割り人形》そっくりで、〝チャイコフスキー節〟の典型。歌劇《チャロデイカ》の序奏、後半の3分50秒からや、幻想曲《運命》の3分08秒あたりからも同様だ。

しかし、さまざまな理由から単独ではコンサートで演奏される機会に恵まれない8曲の舞曲は幾分か異なる。旋法や民俗的なリズムによって〝ロシア〟は濃厚に刻印しているものの、西欧派を代表するチャイコフスキーの作品というよりは、非西欧で民俗的な特徴を打ち出そうとした5人組を連想させるものが多いのだ。例えば唯一の喜歌劇《チェレヴィチキ（女性の履く小さな靴を意味する）》からの〈ロシアの踊り〉と〈コサックの踊り〉、《チャロデイカ》の〈大道芸人の踊り〉は、ムソルグスキーや、ストラヴィンスキーの《ペトルーシュカ》へのリンクを感じさせる。

秘曲集的に聴く場合は、《蝶々夫人》か《トゥーランドット》みたいに始まる幻想曲《運命》が重要だ。収録曲中最も長い16分ほどを要するこの幻想曲は、《悲愴》作品74よりも大きな作品番号77が付けられているが、実は最初期の28歳の作品。オーケストレーションもかなり凝っていて、例えば曲が閉じられる直前のトライアングルの連打のような意外性のある実験も興味深い。もうひとつは、同じく1868年に作曲された歌劇《ヴォイエヴォーダ（地方長官）》作品3の序曲。同名の交響的バラード《ヴォイエヴォーダ》作品78（こちらは正真正銘、後期の作品で、チェレスタやピストルが使われる）とは全く無関係の作品で、冒頭の主題からロシアを刻印している。この開始部はボロディンかリムスキー＝コルサコフを連想させるが、叙情的なエレジーに転じる4分13秒からは、完全に〝チャイコ節〟。この2曲は、チャイコフスキーがスコアを破棄してしまったため、パート譜から再構成されたもの。チャイコフスキーの作品を時系列的に捉える意味でも聴き逃せない。